

狼の檻三

美知代

或る夕暮の事である。私は誰一人連も無く旅先からの歸途、まだ村迄は小一里もあらうと云ふ處で、運悪く暴風は今にも襲つて來相な空合。いやに紫掛つた大きな雲が後の森から既うすつと前の森へと渡染で、細長い灰色の雨雲は頭上に押被つて、如何でも降らないではきかぬらしい。今迄息苦しい程蒸熱かつたのが、突然氣味悪い薄寒さに變ると暗さはいや増して、つい傍に道はあつても厚い榛の木林の中で曲つて、容易には進みも兼ね、烈しい風が颯と渡ると梢が酷くざわついて、大粒の雨がぼつり。ばらばらと木の



葉に注いで、稲妻がざらり。と引續いて  
 夥しい雷鳴、やがて雨は瀧津瀬と流れ落  
 る。私は二三歩ふみ出して見えたが、一  
 寸先も見分ぬ間ではあり、直に立止つて  
 兎に角何處か可然避場を求めるとした  
 身を曲めて面を被ふた儘じつと氣長く  
 暴風の小止みを待つて居る。俄に光つた  
 稲妻で、道の向に何物かの影を認めた、  
 よく見て居ると怪しものは何やら此  
 方を指して、果ては此身近く寄つて来る  
 思ひ切て、

「誰だッ」  
 「俺ハア山番でがんす」  
 私が姓名をなると、

「知つとりますたよ、だら邸さ歸らしや  
 りますだあね」  
 「さう、併し此暴風でね」

「され〜」  
 青白い電光が山番の頭から爪先迄はつ  
 きり見せて一瞬、忽ち雷の一聲頭上には  
 ためて雨は愈々降り頻る」  
 「から止み相にも見えましねへ」  
 「此奴、困つたなあ」  
 「だら旦那、俺の小舎さ御座らしやり  
 ませ」

「併し氣の毒だよ」  
 「何〜に旦那、御座らしやりませ」とそ  
 そくさ云つて、早や先きに立つて案内す  
 るので、滑るやら躓くやら、私は垢道を  
 散々行き惱んだが、やがての事。  
 「俺の小舎さ此處でがんす」  
 と見ると小柴垣で圍つたさ、やかな小舎  
 が一棟、其小窓に、薄明がぼんやりさし  
 て、戸を叩くと、よく透つた可愛い聲で  
 「今行くよ」ばた〜素足で駈出す音が  
 して、鐵栓がさしむ、と身巾のせまい舊  
 ぼけた着物に、前掛けの紐を帯代りに結  
 んだ、十二三の小娘がカンテラを持つて  
 顯れた。

「旦那に燈のう御見せ申せ」と娘に命じ  
 て、  
 「俺其間に一寸らくして來ますべえ」  
 娘は恥し相に私を見入つたが、前に立つ  
 たので其儘後に從ふた。小舎と云ふのは  
 唯一室切りの、梁の低い煤けた、建具  
 と云へば障子も無ければ襖も無い、何や  
 らの毛皮が壁に掛つて、其横には舊式の  
 鐵砲が一挺、檻樓切れば隅の方に山を成  
 して、かまどの傍には大きな壺が二つ並  
 んで居る。肥松が卓の上で明々と燃え上

るかと見れば又悲しげに消えかゝつて、  
 室の中央に搖籃が一ツ、娘はカンテラを  
 消して其傍に座つたが、右手に搖籃を押  
 し乍ら、片々の手は煙つた肥松の始末を  
 する、私は四邊を見廻して密に胸を壓へ  
 るのであつた、實際夜中百姓家を訪れて  
 楽しいものではない、搖籃の中の赤兒の  
 息さしは急しない。  
 「御前一人なの？」  
 「え有るか無いかの聲でやつと答へる」  
 「山番の娘かね」  
 「え」  
 戸が開いて山番が入つて來て、床の上の  
 カンテラを取上げ、卓の上に載せて火を  
 ともした」  
 「旦那あ此様な肥松べえ馴れさつしやら  
 ねえだによ」  
 自分はじつと見入つたが、香が高くそれ  
 に格好して肩幅の廣い、實に立派な逞し  
 い筋骨はぬれた山褌袴の下から表はれて  
 黒い頬髭できつ相な男らしい顔の半はか  
 くれるけれど、小さな褐色の瞳は、濃く  
 生え續いた太い眉の下に、如何にも勇ま  
 しげに輝いて見える、私は禮を云つて、  
 さて姓名を聞いた、

「俺が姓舎のう權三でがんす、じたが混  
 名お狼の權ちますだあ」  
 私は一段の好奇心にかられて、又もやつ  
 くづくと見入るのであつた。兼々此男の  
 諷は聞いて居る、此界限の水呑共から、  
 狼の權と云へば宛ら悪鬼でもあるか  
 の様に恐れられた山番で、只一條の小枝  
 にしろ、其なわ張り區域から無斷で持出  
 さうものなら、それこそ大變奴は屹度見  
 付ける、其上非常な強力でうつかり反抗  
 も出來ないのみか、酒であらうが現金で  
 あらうが、其様な物には見向きもせぬと  
 云ふ難物だ。

「それじや御前が狼の權か、随分と諷は  
 聞いているよ、些少も容赦はしない物だね」  
 「俺ハア何も俺が務するばかりでがん  
 す、義務のう欠いで、主人のもの只食ふ  
 法ありましねえだ」  
 帶の間から手筈をぬき取つて、肥松破り  
 を始め出す。

「内儀さんは居ないのかね」  
 「居ましねえだ」  
 「死亡つたのだらうねえ」  
 「否」と云つたが「左様でがんす……左様  
 におつ死ました」と付加へてついと他

を向く、私は駈つて居た、と私の様子  
 尻目にかけて「畜生奴、何處さ馬の骨だ  
 か行商人の奴べい一緒に逐電のうこいた  
 でがんす」と苦笑した、  
 娘はうつむいたが、急に赤兒が目を覺し  
 て泣き出したので、搖籃の傍にすりよる  
 「これ食せなよ」と權は不潔らしい哺乳  
 器を娘の手に突遣つて「畜生奴、餓鬼さ  
 放棄りやがつた」低調子に云つた。而し  
 て戸口に行つたが振り返つて、  
 「お前様の様な旦那業にや、俺がの麥飯  
 さむくめえ喃」  
 「何かまわらないで好いよ、些少も空腹か  
 ないんだからね」  
 「エラ濟みましねえ、あぢよ云ふても茶  
 のう一つ御座りましねえで……」ピシヤ  
 リ戸を閉め切つて出て行つた。私は更に  
 四周を見廻したが、其處いらの様子が何  
 だか前よりも淋しい様に思はる、陰々  
 としてこもつた、噎つばいいな臭の煙  
 が胸を押し息苦しい、娘は座つた儘些  
 少も動かないで、じつと下を見入つて計  
 り、始終搖籃を押して、ともすれば開き  
 勝の着物の袷をおど〜かき合せて居る  
 「何と云ふ名だら」

「梅野」漸と答へて惱ましげな様に向も  
 うつむく。  
 權は入つて來るといきなり鐵砲をとつて  
 火口を検査める。

「そんなもの何うするんだ」  
 「ちとんべい悪戯しとるで喃」  
 解らないので不思議相に見つめると、  
 「扇谷の上さ木のう切つとりますだあ」  
 「此處に居て知れるかね」  
 「俺がにや解りませだあ、俺一寸ら奴さ  
 捕へるだあで、旦那待つて、くんなさろ」  
 「……ついで行つちや悪いかい」  
 「何の何の御座らしやれ、したが俺急ぐ  
 だでお前様ちとんべい横さならしやしま  
 せ」  
 其儘出て行つたが、程無く生捕をつれて  
 歸つて來た。  
 「旦那此奴でがんす、今に見る痛い目見  
 せて呉れるぞ」と百性風の生捕を指して  
 云ふ。

「まあ〜手荒な事はしないが好い」  
 百性は額越しに私を盗み見る、私は如何  
 がなして救つて遣り度いものだと、心密  
 に誓ふのであつた。渠はじつと座つて身  
 動きもしない、



カンテラの光で私は全然其様子を見る事が出来た、皺だらけの顔で、きよとくした其眼差、瘦せこけた其手足……娘は丁度其傍に轉んで眠つて居る。蟋蟀が隅の方で鳴くと、雨は屋根板を叩いて小窓に流れる、自分等はすべて沈黙。

「權三權三さあ」突然潰えた様な聲で百性が呼び掛けた、

「何だ」  
 「助けて呉んさる、俺悪氣あるでねえ、全く貧の盗みだによ」

「したか盗みのうしる云ふ法ねえだ」  
 「俺悪いだに免いて呉んさる」

「なんねえだよ」權は嚴に云ひ放つた、  
 「助けて呉んさる」と絶望し切つた悲しい調子で繰り返し「俺ハア神がけて御恩のう忘れましねえだ、何卒俺一生の頼みでがんす、餓鬼さ泣く、御前様知つての通りだわに」

「なんねえだよ、何故ちて俺がの自由で無え俺ハア責任負ふと思へ」  
 「其處んところ頼むだわで、のう權三さあ」

「やれ、汝と話べえしちよつたら結末さねえ、黙のとれ口利くでねえ」

可哀相に百性は其儘首うなだれたが、宛ら熱でも病む者の様に總身をふるわして息差も苦し相、私は見兼ねて、  
 「ねえ權三見のがして遣つて呉れ、材木は俺がつぐなふから、可哀相じや無いか」  
 「なりましねえ、此奴盗みしたでがんす」  
 「併し……」

「これ計りはなりましねえだ」  
 と突然百性は突立つて

「だら此處さ来て打殺せ、情無し奴！」  
 「汝酔とるだんべえ、勝手な熱さはざく鹽梅何うでもハア常でねえだ」

「酔ふとる、酔ふと酔ふめえと汝が財布さ厄介のう掛けねえだ、畜生！」

「ほそべえかむでねえぞ」

「あじよにもしやがれ、したか覺えて居るよ人に恨さあるもんか無かもんか」  
 權が立上ると、

「殺せ、早く殺せ、殘忍な調子で續けるので娘は急にはね起された。」

「饒舌るな！」と怒鳴つて二三步前に進む、

「待て權三、持つた」

「俺ハア俺がの勝手に饒舌るだ」と百性は更に續けて「畜生覺えてるよ、大い面

のうしるのも最早長うはねえだ、汝が首さつ付いて呉れべえ」  
 權は胸倉を取つて引するた、私は其間に押入つて百性を支へ様とする。

「旦那邪魔さつしやるでねえ」權が叫ぶ私は拳固をかためて用意したが、驚ろくまい事か、權は百性の腕のいましめを解いて、其ろりがみを取つたなり戸の外へと突出すので。

「盜賊奴、此頃さ免すでねえぞ」

「權三俺は全く驚ろいたよ」

「止めさつしやりませ、旦那そんだら行さますべえか、雨え小降りでがんすに」  
 半時間の後、私は權と森の端れに別れるのであつた、  
 (完)

